

月報岡崎の教育

平成 2 年度 No. 203~214



岡崎市教育委員会



4月号

平成2年4月1日
発行 / 編集
岡崎市教育委員会

学校の前の急な坂道を
新しい顔がのぼってくる
制服は一人前だがまだ幼さが残る
四月 いよいよ始まる

教室の手前でひとつ 深く息を吸う
さあ今 出会いの瞬間

がらりと戸を開ける

輝く瞳が一斉にわたしを見つめる
まぶしい思いで見つめ返す
わたしの投げかける言葉に
元気よく笑い ざわめき うなずく
その真剣への快さと怖さ

数々の偶然を重ねて

今 わたしはこの子たちと出会った
この偶然から 何が生まれるか
今のこの輝きを大切にしたい

三年後

この子たちがこの坂を下りるまで

〈出会い〉

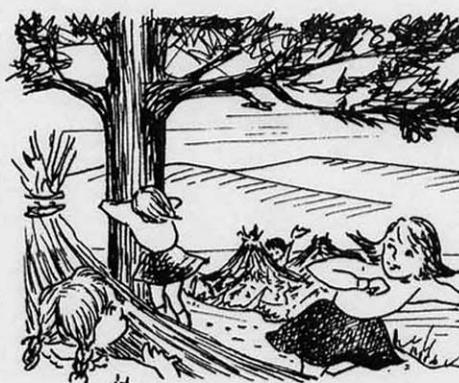


(やる気いっぱいの新入生登校風景－常磐中)

私の専門は理科教育学です。

世間でこのように自己紹介しても、「理科教育学とは何ですか?」という質問が返ってくるほうが多いのです。学校の先生方でも、特に年配の方には御存じない方が大勢おあるいはいかと思います。それも無理なことで、かつて大学では各教科の教育に関して専門家がないことが多かったのです。

しかし今日の教員養成大学・学部には



— 教育隨想 —

新しい學問

川上 昭吾

各科教育の研究者がいることが望ましい

あるのではないでしょうか。

私は、教科教育学を教員養成部を特

徴付ける独自の學問分野として位置付け

ています。したがってこの分野の研究者

は、文学部や経済学部から新しい人を迎

えます。そこが教員養成部だけ

ではありません。自然科学分野の

担当者が定年を迎えた後は、理学部や工

学部から新しい教員を迎えます。ほかで

は、文学部や経済学部から新しい人を迎

えます。そこが私の夢です。

次に、これまで研究したことを少し紹

介いたします。

一つは、地域の自然を生かした理科指

導の推進です。これは私が十四年前にこ

の分野の研究に入つて以来の課題です。

理科教育の実践的歴史とルソー、ペスター

ロッヂ、デューアなどを見て、当然と私

には思えるこのことが、十四年前の理科

教育にはありませんでした。探究の行き

過ぎと、その結果として日本中同じ内容

の理科教育が行われていました。自然を

学習内容とする理科が、自然から離れた

理科を行っていました。

二つ目は個性化教育の推進です。伝統

的な「一斉授業」を、基礎的基本的な内

容の定着をはかる「基礎学習」と、子供

一人一人の個性に応じた展開をする「發

展學習」に分けることが、現在の日本の

教育環境下で教育の改善を目指す場合に

は最も良いと思つてはいますが、教育

や心理の分野についても同様に旧帝大系

の教育学部から新しい人を探つてゐるの

を見るところが大きくなります。このよ

うに、教員養成学部では人的つながり

は全くと言つて良いほどなく、人を通じ

た学問の連続発展の場はありません。教

員養成学部が低迷していた原因がここに

あるのではないでしょうか。

その理由の一つは、既存の教育学や心

理学は研究が深まり、小・中学校の各教

科の教育のあり方まで立ち入つて研究・

教育する余力がなくなつてしまい、どう

が必要になつたという単純な理由です。

わらべ歌への取り組み

音楽科指導員

酒井 正子



教室の黒板いっぱいに、子供たちが描いたたくさんのいも虫。カラフルでかわいい絵でうめつくされ、授業への期待感をいだかせるのに十分である。

「さあ、音楽の授業を始めますよ。」

先生のひくオルガンに合わせて、元気のよい「いも虫ごろごろ」の歌声。ちょっとどなりすぎの声だなと思って聴いていると、

「今度は、すづごく小さい声で歌つてみよう。」
子供たちの声はぐんと小さくなる。

「じゃあ、今度はとなりの人の声をよく聴いて、いも虫のおかけっこ。」
じくする学校や個人とそのような授業作りを行つています。

これは学力差が大きい数学や、英語に見えるところが大きくなります。このよう

な状況で良いと思つてはいますが、教育

と教育する余力がなくなつてしまい、どう

が必要になつたという単純な理由です。

その理由の一つは、既存の教育学や心

理学は研究が深まり、小・中学校の各教

科の教育のあり方まで立ち入つて研究・

ふるさとシリーズ

この人に聞く



相撲一筋

柳澤 利男 氏

「ふるさとシリーズ—この人に聞く—」
相撲の強い子に、体の丈夫な子にと親の願いは様々ですが、私の相撲の目的は、まず心を育てることにあります。心とは礼儀のことです。そして、世の中に役立つ人、人に好かれる子を育たいのです。一流選手の陰には、縁の下の力持ちがいることがわかる子です。技術は基本が第一です。基本とは押しで、まわしを持たせないことです。基本を忘れるごとに成長しません。そして、練習量を増やせばほとんどの技は、身に付いてくるものです。」

きつぱりといつて切る口調には、説得力がある。

「大きな大会に出場できるのは一部の子ですが、私は教室の子を大勢連れて行くことにしています。遠征先では、その子に合った係仕事を持たせ、責任をまつとうする喜びを与えるのです。出場する子には、勝つても負けても礼儀だけは忘れるなど言っています。ですから、ガツツ・ボーズは相手の気持ちを考えたらそれものではありません。」

「この好成績は私の力ではありません。会社勤め・自営の仕事があるのに練習日には、きちんと顔を出してくださる連盟の方々の相撲にかける熱意が実を結んだのです。大会近くになると連日の

練習で遅くなり、帰りは迎えを頼むのですから、選手の家庭の応援も忘れてはならないと思います。相撲は、おかのすく競技ですので、家庭の食事が大事なのです。ですから、母親の力が大きいとも言えます。」

相撲教室に入ってくる子供たちは様々である。また親の願いも違っている。

「相撲の強い子に、体の丈夫な子にと親の願いは様々ですが、私の相撲の目的は、まず心を育てることにあります。心とは礼儀のことです。そして、世の中に役立つ人、人に好かれる子を育みたいのです。一流選手の陰には、縁の下の力持ちがいることがわかる子です。技術は基本が第一です。基本とは押しで、まわしを持たせないことです。基本を忘れるごとに成長しません。そして、練習量を増やせばほとんどの技は、身に付いてくるものです。」

（住 所）岡崎市美合西町白針十四一一
（生年月日）昭和五年九月十七日



られるN紡に就職された。

「体が大きいことを見込まれて、相撲部に入ったのが、相撲との出会いです。」

「入ったのが、相撲部でした。」

「全国青年相撲大会にも出場させていた

だきました。昭和四十年に、現役を退

きましたが、岡崎の相撲を盛んにしよ

うと連盟の方々と後進の指導をやつて

貢献したが、幸せです。これも会社の

理解があつてこそできるのです。」

愛知県相撲連盟常任理事・同審判委員長の柳澤氏には休日も無い。しかし、家

に帰れば、奥様、娘さん御夫婦とお孫さ

ん三人の家庭の団らんがある。これが相

撲に情熱を傾けていける源と感じた。

長の柳澤氏には休日も無い。しかし、家

に帰れば、奥様、娘さん御夫婦とお孫さ

ん三人の家庭の団らんがある。これが相

撲に情熱を傾けていける源と感じた。

柳澤氏には、長野県上田市の御出身であ

つと玉手箱に集中する。その玉手箱の中からは、また虫の絵。さらに、イメージをふくらませるに十分な四匹の絵が

でてくる。

「今から、オルガンをひきます。よく聴いて、この四匹の中のどのいも虫の感じに似ているか見て下さい。」

「いつも虫ごろごろ」の曲が流れる。茶色っぽい太い感じの絵に子供の日が集中する。次は、音色もかえてピヨンピヨンとはねるような感じで、そしてのんびりとゆったりとした感じでと四匹の雰囲気に合わせて曲が流れれる。じっと聴き入る子供たちは真剣そのものである。

新指導要領では、わが国の伝統的な音楽、地方に伝わる音楽を一層重視して指導することが改善の基本的なねらいの一つとして示されている。しかし、テレビ等でテンポの速い曲が、絶え間なく流れている時代である。わらべ歌を取り入れても、楽しく歌わせるのはなかなか難しいものである。が、このあと歌に合わせた身体表現、きれいな歌い方のチャンピオン大会など工夫された授業の流れで子供たちは音楽的に十分活動し、四十五分はあつという間にすんでしまった。授業の流れの工夫は、発問の一つ一つにもあらわれ、発問のたびに集中する緊張感があった。わらべ歌も、教材への迫り方をいろいろな角度から考へることによつて楽しく歌えるという授業であった。



(一) 学ぶ楽しさを獲得させ、自ら学ぶ態度や習慣を育てるために

子供たちはだれもが、わかりたい、でいるようになりたい、学ぶ喜びを味わいたいといった欲求を持っている。

子供は自らの力で問題が解決できた時、大きな喜びを感じ、自信を持ち、次の活動へと意欲を燃やすようになる。

で指導したい。

第一点は、できるだけ子供の身近な生活の中から問題を掘り起こし、自分の課題として解決への必要感を持たせるよう

に学習問題を工夫する。

一人ひとりの子供が、問題を自分の課題として切実に感じ必要感を持ってば、問題の解決に向けて追究しようとする意欲も喚起され、学習に対して主体的に取り組むようになるにちがいない。したがって、教師は、子供の実態を的確に把握し、子供が驚いたり、疑問を持ったりするような適切な教材を選択し、その提示の方法についても創意工夫することが必要である。

第二点は、基礎的・基本的な知識・技能を身につけさせるとともに、学習の仕方を学ばせ、自ら学び続ける力の育成に努めるようにする。

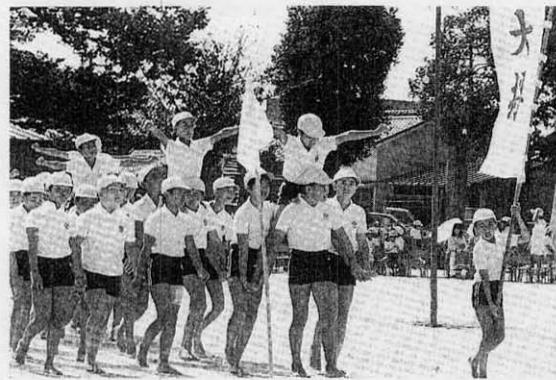
主体的に学ぶ力をつけるには、主体的に学ぶという経験を身につけること

が必要である。大切なことは、子供が自らの力で問題を解決する場へ追い込み、解決し終えるまで待つことのできる教師でありたい。また、一人ひとりの子供の考え方を大切にし、たとえ誤った考え方にも教育的な意義を認め、常に称賛や励ましを与え、子供に自信とやる気を持たせるように配慮したい。教師は常に一人ひとりの子供の日々の姿を注意深く見守り、それぞれの子供に応じた支援ができる能力や技術を高めるように努力したい。

(二) 礼節を重んじ、こころゆかたな児童生徒を育てるために

今日の文化は、日々急速な発展を遂げ、私たちの生活は満ち足りたものとなっている。しかし、この物質面の豊かさにひきかえ、心の貧しさや道徳性の低さが目にあまるようになった。著しい都市化や核家族化の波に、子供たちの日常生活は自然や人とのかかわりが希薄となり、甘えや無責任で衝動的な言動が目立つてきている。

この現実を踏まえ、「礼節」と「ゆたかな心」を重点に、学校教育のすべてを通して、心の教育の実現を図りたい。自然に笑顔であいさつを交わすことにより、師弟の間には敬慕と慈愛の心が、友達の間には温かな友情が育つてくる。



二十一世紀に向かう教育の指針として、学習指導要領が告示されて以来、その先導的試行もいくつかなされ、それぞれに成果を上げている。国際化・情報化の著しい今日、学校教育に求められているものは、知・徳・体の統一ある児童生徒の育成と生涯にわたる学習を支える基盤の形成である。

岡崎の教師は、教育者としての使命を自覚し、全校一致の指導体制のもと、敬愛の情で結ばれた師弟関係をさらに強め、学校・家庭・地域が一体となつて、岡崎の教育の継承と発展に一層の努力を傾けたい。

指導の重点

- 一、学ぶ楽しさを感じさせ、自ら学ぶ態度や習慣を育てる。

一、礼節を重んじ、ここりゆたかな児童生徒を育てる。自らを律し、たくましく生きぬく生きぬく力を育てる。

(三) 自らを律し、たくましく生きぬく力を育てるために

かつては、家庭や地域社会において、人として守るべき規範が、子供たちに教えられてきた。しかし、今日それらの教育力は低下し、生徒指導上、さまざまな問題が生じてきている。そのためには、自分で自分の生活を律していく力をつけ

る。しかし、友達や仲間ではない。そこには当然長幼序があること、礼を失してはならないこと、親の恩、師弟の関係について礼節の大切さを子供たちに教え導くことが大切である。もちろん、私たち教師は、子供たちが心から慕い、敬つてくれるような人格と力量を身につける努力を怠つてはならない。

ゆたかな心については、野外活動や勤労体験学習、動植物の飼育栽培等を通して、子供たちに、汗を流すことの尊さ、命の大切さや畏敬の念、思いやりの心、奉仕の心を体得させたい。

子供たちは、日常生活の中で、意欲的に取り組み、自分の力を出し切った時、心は充実し、安定てくる。やる気は子供が伸びようとする力であり、自分で自分を形成していく力もある。一人ひとりの子供が、それぞれ自分の能力にあつた目標を定め、自分の意志で努力する体験を積み重ねる中で、心のゆたかさが育つていく。

第三は、積極的に自然に親しませる大切である。敬愛する教師の称賛ほど子供の心を奮い立たせるものはない。たとえ失敗しても、挫折することなく、再び挑戦する覇氣と粘り強さを持たせたい。そのためにも、教師は、子供の努力をじっくり待つ余裕を持ちたい。さらに、子供の遅々とした努力でもほめることが大切である。敬愛する教師の称賛ほど子供の心を奮い立たせるものはない。

第三は、積極的に自然に親しませる大切である。自然は、たくましくして、命の尊厳さ、たくましさを教えてくれる。幸いにも、岡崎市の小中学校は自然の環境に恵まれている。その自然に子供たちを十分親しませ、自然の中で考え、行動することできさまざまな体験を通して、たくましく生きる力を身につけていく。

させる必要がある。

その第一は、小学校の段階において、基本的な生活習慣の徹底を図ることである。あいさつ、言葉遣い、時間や規則を守ることなど、集団生活をしていく上で必要な基本的なことを体得できるまで繰り返し指導したい。その体得の過程で、自己の規範が芽ばえ、自律の心が育つていく。指導方法としては、子供の発達段階を踏まえ、無理なく、しかも機を逃さず指導することが大切である。



「先生、怒つたら 可哀想やんか」

竜谷小 澤田 友和

書物を読んでいて、心を揺さぶられる言葉（文）に出会うことがある。そんな言葉を求めて

「彼の生きかた」という本を読んだ。早々に、次の文にでくわした。

「先生、この子はドモリなんやで、怒つたら可哀想やんか」ぞくつとするものがあつた。

自分にもあてはまるところがあるのではないか。自分

が気づかないうちに、子どもにそうした言葉を浴びさせていたの

では……
その年から、生徒指導の担当となつた。講習会に何度も参加させていただいた。「登校拒否児への対処法」、そこには、自分が考え方・指導技術を大きく変えさせるものがあつた。
教職歴十年を越え、周囲からも「中堅」と称される年代である。教育に対して何となく慣れと慢心を抱きはじめていたろうか。年度当初に出会った本、その度に目覚めさせられた講習会、そして、何よりも前の前視点を与えた。

子どもたちに戒められ、新鮮な視点を与えた。子どもたちの実態はさまざまである。自分の非を認めるよりも先に他人の非を主張する子。仲間からの中傷に敏感で、一人になることをことさら避けるにとかわららず、グループになると特定の子をのけものにしてしまう子。「わがまま」を認めず自己主張を繰り返す子たち。本気になって指導を重ねても、時には子どもたちの感情によつてそつぽを向かれたり、逆効果であつたりする。

「子どもが悪い」と言つてしまふのは簡単である。やはり、指導がまずかったと考えたい。子どもの感情によつて指導が無

力となつたとしても、教師としての自分の力量を高めることで対処したい。今となって、そんなことに気づいている。子どもたちの成長をあとから追いかけている次第である。

「子どもは担任が好きである」新任の時、自分がつくったこの命題を信じて教職を続けたい。私の数々のあやまちを許してくれたはずの子どもたちのために。

「赤ちゃんの頃や小学生の頃の写真をスライドにしてみたらどうだろうか」

「小学校の先生や転任された先生の声も聞きたいね」

「みんなの思い出を劇にしてみる」と受けるよ」

原案が決まってから生徒の活動には、目を見はるものがあつた。写真を集め、説明の文章を考える者、テーブレコーダーを肩に母校を訪れ、恩師の言葉を取材する者、台本を作り、役を決め劇の練習をする者など、意欲的に準備をする姿が見られた。

「立志の式は、とてもしつかりできた。笑うときは笑い、やるべきときははつきりやれたと思う。特に集いの部は、とても楽しかった。今まであまり将来のことを考えていなかつたけれど、真剣に考えなければと思った。このような級長会の活発な活動が、しだいに一般の生徒にも広がり、立志の式を成功させよう」というムードが盛り上がり、立志の式を成功させようとした。

立志の式は、本校では初めての試みである。「行事は、できるだけ生徒の手で」という考え方から、今回も「集いの部」の計画から運営まで、すべてを生徒の手で行わせようと考えた。十四年間の歩みをどのように表すかと、毎日のように級長会が開かれたが、なかなかよいアイデアが出てこない。思わず意見を述べたくなる。しかしここで教師が出ていけば、生徒の手による式ではなくなるのでは、と思いながら、じつと見守ることにした。回を重ねるにつれ、話し合いも活発になり、いろいろな案が出てきた。

「赤ちゃんの頃や小学生の頃の写真をスライドにしてみたらどうだろうか」

「小学校の先生や転任された先生の声も聞きたいね」

「みんなの思い出を劇にしてみる」と受けるよ」

原案が決まってから生徒の活動には、目を見はるものがあつた。写真を集め、説明の文章を考える者、テーブレコーダーを肩に母校を訪れ、恩師の言葉を取材する者、台本を作り、役を決め劇の練習をする者など、意欲的に準備をする姿が見られた。

「立志の式は、とてもしつかりできた。笑うときは笑い、やるべきときははつきりやれたと思う。特に集いの部は、とても楽しかった。今まであまり将来のことを考えていなかつたけれど、真剣に考えなければと思った。このような級長会の活発な活動が、しだいに一般の生徒にも広がり、立志の式を成功させよう」というムードが盛り上がり、立志の式を成功させようとした。

立志の式を通じて、生徒はいろいろなことを学び、感じ取ってくれたと思う。今後も、できる限り生徒の手による活動を大切にしていきたい。

立志の式

六ツ美中 辻村 清孝



教育日々



お知らせ



(寄贈刊行物・資料等)

◆背中の勲章 横井

A5 二六二ページ

◆小さな証 太田 清美

◆算数・数学指導の手引

第九集 アイデア集

◆続々・ふるさと上地 上地小

◆現職教育算数・数学部

男四〇名 女六二名

梅園 岡根久子 木全美千代

◆表彰される新任のみなさんは

名、女八〇名)である。

期待される新任のみなさんは

次の通りである。

◆期待の新任教員一三四名

平成二年度岡崎市小中学校新規採用教員は一三四名(男五十四名、女八〇名)である。

◆期待される新任教員一三四名

期待される新任教員一三四名

■期待の新任教員一三四名

平成二年度岡崎市小中学校新規採用教員は一三四名(男五十四名、女八〇名)である。

期待される新任教員一三四名

福岡 川合謙和 天野季和子

高井裕子 小竹純子 高木紀子

阿部浩 福井由美

太田幸恵 小林明子

藤川村上徹 城南渡辺武

柴田泰枝 尾畠あけみ

山中三浦浩登 小田英宣

青木孝 松坂禎文

梅園岡根久子 宮地ほづみ

塚本恭子 塚谷保 前川あゆみ

根石三浦淳一郎 生平曾田邦子

横井正敏 上野泰子 北野岡秀之

杉浦史恵 塚本恭子 永井靖人

羽根根常磐南 岩瀬茂

横井政彦 宮地久美子 宮田美智子

山口みのり

岡崎藤田宏 岩瀬順子 吉川真由美

中谷信子 林律子 渡邊美保子

若原和志 木村ひとみ 河合正浩伊藤美由紀

大樹寺齊木健 小田幸子 中垣みちる

大門連尺 今井朋晴 德原雅治

河合正浩伊藤美由紀

柴田洋子半田美幸

森川倫樹内田夕紀子

伊藤陽子伊藤陽子

山本英津子西野佳子

山本友美枝

奥井利香稻垣久代

山本真由美

矢作南矢作西

矢作北矢作北

矢作南矢作南

村瀬亜矢子

高木紀子

前野奈津子

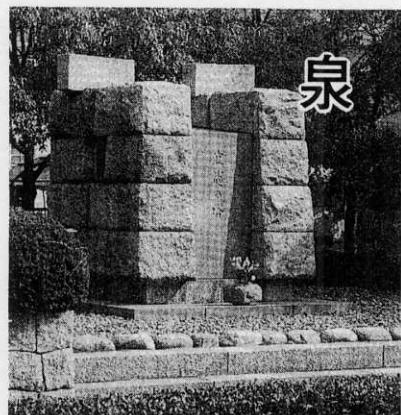
森雄一郎

柴田敏子

前野奈津子

増田協子

春の空に偉容を誇る立志の塔
それは中学生の心のよりどころ
である。



城北中学校

立志の塔

揚期として、この学齢期における教育指導の重要性が指摘され
てきている。

城北中学校では、昭和三十八年、生徒会の発案と創意により、夢や希望、理想を表す塔建設の活動が開始された。その後、念願達成への一致団結した作業が続き、昭和四十年三月に完成。

「われ、十有五にして学に志す」という聖賢の言葉にちなみ、「立志の塔」と命名された。古来より、十五歳は人生の転換期と言われる。心理学的にも、自我意識の発達が顕著で、精神面の高

現在、市内の六校の中学校に規模・形・呼称などは異なつて、このよくな塔がある。生徒の誓いのことばをその塔に納め自覚を高める機会としている。

により、それを通した教育的意味が明確になる。書き残した誓いのことばが納められている立志の塔が、いつまでも生徒の心の支えとなり、母校との心のきずなになることを感じたい。

思い立ったが吉日という。熟考のうえ日和を選んで慎重に事を進めることはもちろん大事だ。が、その機を逃さず、時をおかずして実行に移すこともまた忘れてならないことである。

の時期、よかれと思うことには積極的に取り組みたい。

季節が、早目に巡ってくるのも自然を見直すよい機会となる。

青空に映える満開の桜は、入学式を最後の見せ場にして姿を消した。
街路樹のソツジは、つぼみが膨らんで今か今かと花の咲く出番を待っている。
異常気象のため、春の装いが例年よりも早く始まり、進んできた。

題字

岡崎市長 河合 中磐常 常磐中

滋野井 貴子 山原本由美 原田雅文 相川根雅文 鎮夫

この本も

*日本語相談(一)(二)	大岡信他
朝日新聞社	各￥880
*千利休 無言の前衛	赤瀬川原平
岩波書店	￥550
*誤解された歎異抄	梅原猛
光文社	￥800
*光る源氏の物語(上)(下)	大野晋 丸谷才一 (上)￥1200 (下)￥1300
中央公論社	

愛、 ありがとう 勧山 弘
(株)中経出版 ¥1200

「一隅を照らす」を座右の銘としている著者は、静岡県仏教会長、同公安委員長、アイバンク運動理事長等の公職を持つ真宗の僧侶。昭和55年以来「5分間テレフォン説法」を開始。その説法52話を収録した本である。

わずか5分間の説法であるが、季節の話題、先覚・先達の言行のエキスが豊富にちりばめられており、読み終えて生きるありがたさ、勇気を与えられる。

夏の凝らない学習剤として薦めたい。